

きらめき人

寄木の浜で漁業再開、ボランティアさんとの縁も続く。

高橋七男さん

南 三陸町歌津寄木で漁業を営む高橋七男さん。8年前の東日本大震災では、寄木の浜の工場兼住宅が壊滅したが、家族全員裏山に駆け上がり命は助かった。その後、地域の方々の避難生活がはじまり、軽トラックで山を越え、入谷の親戚から米などをいただいで地域の仲間と共に命をつないだ。

しばらくして旅行会社の知人から、ボランティアの受け入れを打診された。快諾したものの、トイレもない水もない状況で十分な対応はできないと思ったという。

「ボランティアも勝手が分からず大変だったと思うよ。だけど懸命に片付けや資材修理を手伝ってくれた。津波の話しながら、戻り鯉のたたきをごちそうしたら感激していったけな」と振り返る。

熊本で大規模な地震災害が発生したとの報道に、九州の知人と連絡を取りながら、自分が収穫したワカメをすぐに発送するなど交流を続けた。

先日、熊本県益城町の方から、寄木での活動を綴った旅行記が届いたという。高橋さんから聞いた震災の話や養殖業再建への想いなどが詳しく書かれており、受け取った七男さんも「連絡してみるよ」と懐かしそうに笑った。8年が経ち、高台に自宅を構え、工場は元の海岸に再建。現在も訪れる人に震災の話をして、収穫した海産物でもてなしを続けている。

SHICHIŌ TAKAHASHI



出身は歌津泊浜。高校卒業後から約20年北洋トロール船で仕事をしてきた。昭和55年、寄木浜で養殖業を始めた。「もう70歳、本業は息子に任せたい」と穏やかな表情で語る好々爺だ。



今年の6月には南三陸町内で林業経営を行う株式会社佐久に転職。「木材生産以外の木材の利用を企画していきたい」と意気込んでいる。

KANAKO OOBUCHI

「Botanist」——。英語で「植物学者」の意。その文字をとって「ポタンちゃん」と親しまれているのが大漕香菜子さんだ。ひとたび山に入れば、目につく草木たちの物語を教えてください、「雑草」として一括りにしていたような植物が、それぞれに輝きを帯びていくような感覚にしてくれる。

東京世田谷出身の大漕さん。アウトドア好きの親の影響もあって小さいときから、金時山や高尾山といった山に登っていたという。

南三陸との出会いは、植物に興味を持ち続け進学した東京農業大学の4年生のとき。日本自然保護協会の調査員として、震災後の気仙沼・南三陸に残る自然の記録を行った。わずか1週間の滞在だったが、これまで教科書でしか見ていなかった植物がたくさんあり、この土地に魅了された。その後も継続して調査を行い、修士課程終了後、南三陸へ移住を決定した。そこには研究者として大漕さんが大切にしている想いがあった。

「研究者として調査して学会で発表して終わり。ではなく、調べたことを、現場、地域に還元をしていきたい」

研究者として、輝きを放つ南三陸の土地。その輝きを地域や、訪れた人に伝え、広まっていったとき、南三陸の山々は宝の山となることだろう。

大漕香菜子さん

草木に彩りと輝きを与える、小さな「ポタニスト」。

ひとめぐり